16. Familia CLUBIONIDAE フクログモ科

89. *Chiracanthium* sp. コマチグモ

90. *Clubiona jucanda* Karsch スヂアカフクログモ

17. Familia HETEROPODIDAE アシダカグモ科

91. *Heteropoda venatoria* (Linnaeus) アシダカグモ

18. Familia SELENOPIDAE アハセグモ科

92. *Selenops bursarius* Karsch アハセグモ

19. Familia GNAPHOSIDAE ワシグモ科

°93. *Cemuria niger* Kishida n. sp. クロケムリグモ

94. *Yoshidaia typica* Kishida ヨシダグモ

サソリモドキの分布

江崎悌三

サソリモドキ *Typopeltis stimpsonii* (Wood) は大形異形な動物として，又本邦に於ける脚鬚目 (Pedipalpi) の代表者として珍重されてゐる。この種は九州南部及びその屬島に點々と發見されてゐるのであるが，その分布狀態の總括記述されたものはない樣で，今回畏敬の同學高島春雄氏の需もあり，この禿筆を綴る次第である。

本論に入るに先だつてこの珍動物の來歷に就いて漫筆を試みよう。この動物は最初1862年に Horatio Charles Wood 氏によつて *Thelyphonus stimpsonii* といふ名で記載されたもので，その產地は日本 ("Japan") となつて居り，標本は唯1頭であつたらしい。私は今手許にこの原記載を所持してゐないが，この標本はその學名に示されてゐる如く Stimpson 氏の採集品であることは疑な

い。この William Stimpson 氏についてはその經歷を詳しく知らないが，氏は1853年から1856年に亘つて Colin Ringgold と John Rodgers 兩提督の率ゐた北米合衆國の極東探檢艦隊の博物學者で，この探檢は Vincennes, Hancock, Porpoise, Fennimore Cooper, John P. Kennedy の5隻からなり，有名な Perry の探檢艦隊と同時に極東へ向つて出發したのであるが，途中で暇をとつて，日本との開國交涉や，江戶灣 下田，箱館等の測量は Perry の方に先手を打たれて了ひ，結局南日本，特に奄美大島と鹿兒島灣の測量が一番大きな收穫であつた。奄美大島へは 1854年9月12日に旗艦 Vincennes (800トン) と Porpoise (400トン) の2隻が香港を出發して向つて來たが，後者は途中で暴風の爲に行方不明となり，結局 Vincennes は沖繩本島で Perry 艦隊のやつた測量の繼續をして翌1855年1月に鹿兒島灣を經て奄美大島へやつて來た。1月12日喜界島に接近，嵐の止むのを待つて19日上陸，20日から奄美大島の方へ廻り，22日から24日まで上陸した。この間の Stimpson の手記には海產動物のことは二三記事が見えるが，サソリモドキのことは殘念乍ら記されてゐない。從つて彼の採集になるサソリモドキが，何處で採集されたものか，今之を明かに出來ないのは遺憾である。

以上の樣なわけで，このサソリモドキの標本の產地は不明であるが，沖繩本島か，或は本種の特に多產する奄美大島の產と見るのが至當であらう。同艦の立寄つた下田には暖地の動物が發見されるが本種は見付かつてゐない。それでこの“日本”と言ふ記錄も九州本島以北は含まれてゐないと見るのが穩當である。

尙餘談であるが，本種の名付け親の Wood といふ人は1841年1月13日 Philadelphia で生れ，後に Pennsylvania 大學の藥物學の敎授として著名だつた人で，1920年1月3日同市で死んだ。このサソリモドキを記載した時は弱冠20歲の靑年で，これが又氏の處女論文に次ぐ第2のでもあつた。その後この類や多足類に就いて若干の論文を書いたが，賢明にも（？）動物學の足を洗つて，“本

草學 ”の大家となつた。明治33年 (1900) 還暦祝賀の爲かどうかは知らぬが，夏休みを利用して日本へ漫遊に來て，東京から京都，琵琶湖を經て名古屋から中仙道へ出て，天龍川を下り，日光，輕井澤，箱根等にも遊んで歸つて行つた，この時昆蟲や爬蟲兩棲類等を採集して行つた。

1872年9月に Arthur G. Butler 氏は *Thelyphonus* 屬のモノグラフを發表し，*Thelyphonus stimpsonii* に香港を產地として追加した (p. 204)。更にこの論文中で驚くことは朝鮮 (“Corea”) から *Thelyphonus lucanoides* といふ1新種を記載してゐることである (p. 205)。これは Arthur Adams の採集した2頭の標本である。Arthur Adams は日本 朝鮮方面へは二度來朝したことのある動物學者で，氏の採集品で “Corea” となつてゐるものには甚だ多數の間違のあることは，嘗て私も指摘した[1]如くであり，本種の場合は後述の如く Pocock によつて Borneo の誤であるとされたので，この朝鮮產のサソリモドキは一應消滅したわけである。尙又同じ p. 205 に *Thelyphonus sinensis* なる種が記載されてゐるが，その產地は香港で，この種も *stimpsonii* の若い箇體に過ぎぬことが後に判つた。

1894年8月になつて R. I. Pocock 氏は大英博物館のこの類に就いて硏究し幾多の新屬を創設し，上記の通り *Thelyphonus lucanoides* の產地の “Corea” は Borneo とすべきことを指摘し (p. 123)，又 *stimpsonii* は新屬 *Typopeltis* (type : *T. crucifer* sp. n.) へ編入された (p. 126)。彼は本種に就いては Alfred Carpenter 採集の2頭の雌に基いて詳細なる記載をした。この標本は “Oö-Sima (Lu-Chu Islands)” 即ち奄美大島のものである。奄美大島は現在でも，又邦人でさへも琉球の中に入れる人がある。彼は英國海軍士官で，軍艦 “Magpie” に便乘し，明治15年 (1882) 來朝，3月に奄美大島，5～6月には館山灣，東京灣へ來り，更に對馬や朝鮮へも廻り，各所でいろいろな動物を採集して行つた。Pocock 氏は *Th. sinensis* Butler が香港の *Th. stimpsonii* の幼型ならんと言

1) 植物及動物，Vol. 1, no. 3, p. 409—410, 1933.

ひ，且本種と極めて近似してゐると述べた (p. 128)。

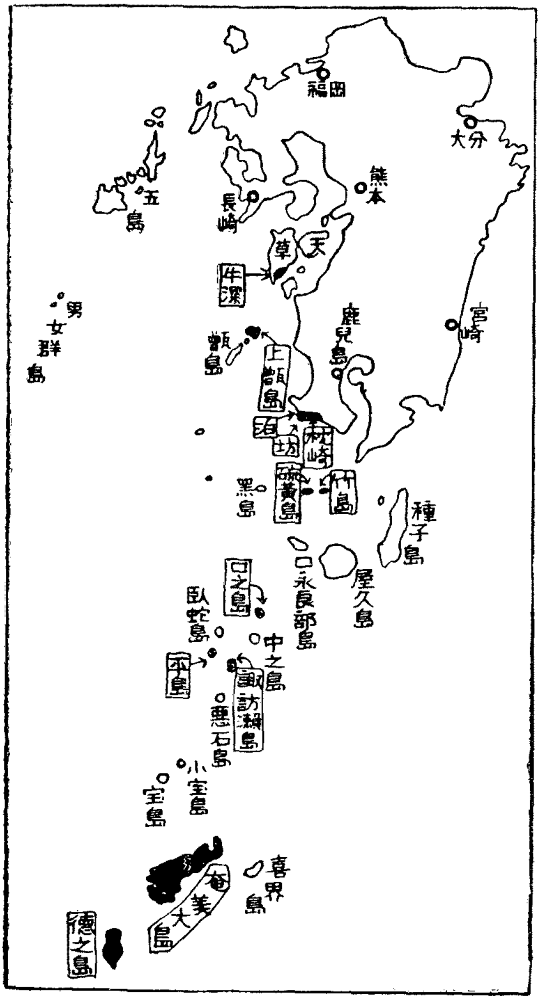
1897年になつて Karl Kraepelin 氏は，有鞭類 (Uropygi) の綜說を發表したが，この中で本邦關係では先づ *Typopeltis formosanus* といふ新種を臺灣から記載した (p. 14)。これは唯1頭の雄に基いたものであるが，採集者も，時も，臺灣での產地も記されてなく，又これは Wien の博物館の標本であつた。又 *T. stimpsonii* の方は從來の記錄に基いて記載し，琉球，香港，日本を產地として擧げ，*sinensis* をシノニムとした (p. 15)。結局 *formosanus* は雄のみ *stimpsonii* は雌のみしか知られてゐないので，之等兩種は同一種であることは疑ないことである。

私は今その原文が手許にないが Kraepelin 氏は1899年になつて Das Tierreich, 8. Lieferung, Scorpiones und Pedipalpi, p. 209 に於て，この *formosanus* Kraepelin (♂) を *Typopeltis crucifer* Pocock (♀) と同種とした。この *crucifer* なる種は上記の Pocock 氏の論文中に記載されたものであるが，產地を擧げてない。次に記す岩川友太郎氏が臺灣のものが始めて *crucifer* と同定された如く言つてゐるのは誤である。

岩川友太郎氏は1908年になつて，臺灣及び琉球（八重山）の標本10頭に基いて硏究し，*crucifer* と *stimpsonii* と同種であることを知り，前者を後者のシノニムとした。結局本邦のサソリモドキは次の如きこととなるのである。

Typopeltis stimpsonii (Wood, 1862) (*Thelyphonus*)
= *T. sinensis* (Butler, 1872) (*Thelyphonus*)
= *T. crucifer* Pocock, 1894
= *T. formosanus* Kraepelin, 1897

扨長い前置きを終つて分布論に入るわけである。支那方面のことは後に說くとして，先づ臺灣であるが，臺灣では私は南端の恒春半島には極めて普通であるのを觀察し，東海岸では臺東から花蓮港方面まで產することは確かの樣である。其他の地方，特に山岳地帶でどの邊まで發見されるかに就いては私は詳細



サソリモドキの分布略圖
黑き部分（地名に枠を附す）は産地を示す

を知らず，切に識者の御示教を待つ次第である。

琉球では恐らく大部分の島に發見されるものと思ふが，私自身標本を採集したのは石垣島と沖繩本島のみである。之等に就いても將來精査する價値があると思ふ。石垣島には多い。黑岩恒氏によると，琉球では西表（いりおもて）島に最も多く，石垣島がこれに次ぐと言ふ。

奄美大島には全島の平地，殊に田畑，人家の附近等に極めて多い。同島では“ヘヒリムシ”又は“フフィリャムシ”と稱することは私が既に記した。[2] 最初に記した樣に本種の type locality は恐らく奄美大島であらうし，又この島からは Pocock 氏によつて古く1894年に記錄せられ，其後も福田

2）植物及動物，Vol. 1, no. 11, p. 1651, 1933.

卓（駒井卓）氏の觀察記事がある。同氏によれば德之島にも產し，土名を“ツツパシヤン”と言ふ。大島附近の奄美群島中の分布も將來の精査を要する。

扨分布上問題となるのは奄美大島以北，即ち本種分布の北限地域での分布である。これに就いては近來幾多の調査觀察によつて，相當正確に解つて來た。先づ九州本島と奄美大島の間に散在する吐噶喇群島に於ける分布を見るに，甚だ奇異なる狀態を示してゐる。私は昭和9年(1934)5月同群島學術調査團（澁澤子爵主催）に參加して同群島を巡遊した時，先づ硫黃島にて本種の生標本を得，永井龜彥氏と共に之を携へて他の島々にて島民に之を示し，その存否を確めたことがあつた。その後永井龜彥氏によつて多數回の調査が行はれ，その結果は同氏により發表されてゐる。卽ち本種の發見される島は北部から竹島，硫黃島，口之島，平島，諏訪瀨島の5島で，黑島，中之島，臥蛇島，惡石島，小寶島，寶島の6島には發見されない。熊毛諸島の屋久島，種子島，口永良部島にも今日まで發見されないが，尙精査の必要があると思ふ。併し上記吐噶喇群島中の6島には確かに居らぬと斷言出來ると思ふのである。同群島での方言は“ヘノジョウ”（硫黃島），“ヘヒンジュウ”（口之島），“ヘヒラムシ”（諏訪瀨島）[3]である。

これより先本種が熊本縣天草の牛深で發見された。その發見の由來を述べると，當時天草の富岡町の九州帝國大學附屬天草臨海實驗所に居た池田隼人氏が偶ま昭和6年（1931）2月に天草の本渡農業學校の標本中に本種を發見し，それが牛深の產であることを聞いて，同年3月16日に同氏自ら牛深へ赴いて17頭採集して飼育された。その後私も同じ年の6月22日に4頭を牛深で採集した。この本渡農業學校の標本は同校の太田實といふ生徒が昭和5年（1930）1月2日に牛深で採集したものであつた。同地のサソリモドキに就いては，大島廣，尾上正彥，山口鐵男氏の記事がある。牛深以外の地では發見されない。

---

3) 現在の諏訪瀨島の住民は全部奄美大島から近年移住したもので，從つてその方言が奄美大島と一致するのは當然である。

次で池田隼人氏は翌昭和7年（1932）4月に甑(こしき)島へ採集に行かれたが その時上甑島の中野に於て多數本種を產するのを觀察された由である。同地の方言は“スムシ”と言ふ由である。この甑島に產することは永井龜彥氏が極めて簡單に紹介されたことがあるのみである。

扨嚴密な意味での九州本島にはそれまで本種の棲息が知られてゐなかつたのであるが．その後永井龜彥氏の努力により，薩摩半島の南端の枕崎．坊，泊の附近に產することが確認せられ．同氏自身十數頭を採集された。同地では住民の間には知られて居つたものの樣で“ヘゴマ”(坊)，“スダチ”（枕崎町小湊）の如き方言がある由である。以上列記した各地の方言は總て本種が捕へられた時極めて强烈な醋酸の臭を發散するのに基くことは申すまでもない。

以上を以て本種の本邦に於ける分布の今日までの知見を御紹介した次第であるが．本種は對岸支那の南部にも相當に廣く分布してゐることは疑ない。從來香港から知られてゐる外に，伍獻文氏は1936年に南京の靈谷寺の標本に基いて見事なる圖と記載を與へてゐる。私は最近南京に於て同地產の標本を見．又杭州に於て浙江省で採れた多數の本種の標本を見た。これから推すと支那では揚子江以南の東洋區に廣く分布し，相當普通なものと思はれる。

尙最後に一言すべきは *Typopeltis amurensis* (Tarnani) といふ種が1889年に沿海州の Olga 灣と Tachobes 河の間の地帶から記載されてゐるので，滿洲や朝鮮にもこの屬のものが發見されることがあつても，決して驚くに價しまい。尙又支那には別に1894年に記載された *Typopeltis niger* (Tarnani) が居るのであるが，その詳しい產地は不明で，記載されて以來再發見されたことがない。

F. Werner 氏が1935年に Bronns Klassen und Ordnungen des Tierreiches の中の Pedipalpi を發兌したが 私はまだ之を見る機を得ない。併し本種に關する限り以上述べた以上の新事實はないと信じる。

この小文の執筆に當り甑島に關する未發表の資料を快く御提示下さつた池田隼人氏に厚く感謝の意を表する。

引　用　文　獻

1872 **Butler, A. G.** —— A Monograph of the Genus *Thelyphonus* (Annals and Magazine of Natural History, ser. 4, vol. 10, no. 57, p. 200–206)

1909 **福　田　卓** —— 大島德ノ島見聞記（四）（博物之友, vol. 9, no. 67, p. 154—156)〔サソリモドキ, p. 155—156〕

1903 **Iwakawa, T.** (岩川友太郎) —— On the Specific Identity of the Scorpion-Spider of the Loochoos and Formosa (Annotationes Zoologicae Japonenses, vol. 6, part 4, p. 287—291, pl. 11)

1897 **Kraepelin, K.** —— Revision der Uropygi Thor (Thelyphonidae auct.) (Abhandlungen aus dem Gebiete der Naturwissenschaften, Naturwissenschaftlicher Verein, Hamburg, Bd. 15, p. 1—60, Taf. 1–2)

1895 **黑〔岩　恒〕** —— サソリモドキの產地（動物學雜誌, vol. 7, no. 85, p. 394—395)

1934 **永　井　龜　彥** —— 本縣にて分布上注意すべき動植物（三), 其四. サソリモドキ, 異名シリヲムシ（岸田), ムチサソリ, サソリグモ（鄉土博物時報, 鹿兒島博物學會, no. 3, p. 2—4)

1938 **永　井　龜　彥** —— 南西諸島の動物分布（鹿兒島縣史蹟名勝天然紀念物調查報告書, no. 4, p. 49—52)

1932 **尾　上　正　彥** —— 日本內地に於けるサソリモドキの發見（理學界, vol. 30, no. 3, p. 220)

1931 **大　島　廣** —— 天草雜俎（その五）（動物學雜誌, vol. 43, no. 516, p. 601—607)〔サソリモドキが天草に居る, p. 601〕

1894 **Pocock, R. I.** —— Notes on the Thelyphonidae contained in the Collection of the British Museum (Annals and Magazine of Natural History, ser. 6, vol. 14, no. 80, p. 120–134, pl. 2)

1889 **Ternani, J.** —— Sur les collections de Thelyphonides de quelques Musées russes (Zoologischer Anzeiger, Bd. 12, p. 118–122)

1894 **Ternani, J.** —— Quelques nouvelles espèces de Thélyphonides (Zoologischer Anzeiger, Bd. 17, p. 30–32)

1862 **Wood, H. C.** —— Description of a new species of *Thelyphonus* (Proceedings of the Academy of Natural Sciences, Philadelphia, 1861, p. 312)

1936 **Wu, H. W.** (伍獻文) —— A Review of the scorpions and whip-scorpions of

China (Sinensia, vol. 7, no. 2, p. 113 127)
1933 **山口鐵男** ——サソリモドキの小觀察（鹿兒島高等農林學校博物同志會會報, vol. 3, no. 11, p. 75—76)

寫眞解說

細野善熈

1 ヨツデゴミグモの網 (38. 9. 18). あまり人の踏込まぬ路傍喬木下の叢間。中心のリボンは大抵の場合一回足らず，或は一回半位の正圓形に近いが，これはハート形をしてゐて美しかつたから撮つた。斜右上へ出てゐるやゝ太い一本の糸は，撮影の準備中邪魔になる笹の葉を除いた時に，蛛が驚いて一旦隱れた爲に往復して出來たもの。



1. ヨツデゴミグモの網

2 コケオニグモの卵囊 (40. 4. 7). 枝下5m以上ある杉林。夏季この下には4～5尺位に羊齒や笹が繁つて藪蚊の跳梁がひどい。本年は4/3この蛛の造網を初めて見たが，卵囊のあることを信じてはいつて見るとこれがあり，同一樹幹の反對側にもう一個あつた。私はこの蛛の野外の卵囊は三個見たゞけであ